

タイトル	「カイマン森の儀式」の表象：ハイチ人の歴史意識
著者	浜，忠雄；HAMA, Tadao
引用	北海学園大学人文論集(65)：59-104
発行日	2018-08-31

「カイマン森の儀式」の表象 — ハイチ人の歴史意識 —

浜 忠 雄

はじめに

冒頭、1枚の切手を示す。



ハイチ共和国（以下、ハイチと略す）の0.10グルド（約2円）切手である。切手の下段にはフランス語で正式国名〈REPUBLIQUE D'HAÏTI〉と〈CÉRÉMONIE DU BOIS CAÏMAN-14 AOÛT 1791〉（カイマン森の儀式—1791年8月14日）の文字が書かれている。上段の絵はその「カイマン森の儀式」の情景を描いたものである。

ハイチ建国史を略述する。ハイチは、1697年以来フランス領の植民地（サン＝ドマング Saint-Domingue と命名された）となり、大西洋黒人奴隷貿易によって連行した多数のアフリカ人を奴隷労働力として、18世紀中葉には砂糖、コーヒーの世界最大の生産地となって「カリブ海の真珠」と呼ばれたが、1791年8月に起った黒人奴隷の一斉蜂起を発端とする激しい奴隷解放運動の過程で1794年2月4日に宗主国フランスの革命議会に奴隷解放を決議させ、さらにナポレオンが奴隷制の復活を目論んで派遣した数万の精鋭軍隊を打ち破って1804年1月1日に独立宣言を発して誕生した

国である。この、黒人奴隷解放と独立の運動をハイチ革命(1791~1804年)と総称する。ハイチは西半球でアメリカ合衆国に次ぐ二番目の独立国、ラテンアメリカ・カリブ海地域では最初の独立国であり、1805年に共和制を採用して世界史上最初の黒人共和国となった。ハイチ革命はアメリカ独立革命、フランス革命と並ぶ「18世紀の三大革命の一つ」とされ「世界史上唯一成功した奴隷革命」ともされる¹。

ハイチ人がハイチ革命=建国の発端となった出来事と考えているのが「カイマン森の儀式」である。

「カイマン森の儀式」とはどのようなものだったのか。手はじめに叙述を二つ示す。最初はジャン=ポール・デュヴィオルとペドロ・ウレーニャ=リブの共編になる『カリブ文化辞典』(2009年)中の「カイマン森」の項目の全文。なお、キーワード・フレーズには下線を付した。

1791年8月14日にルノルマン所有のプランテーションで、より正確にはハイチの北部平野のモルヌ・ルージュにあるカイマン森のなかで、奴隷たちの重要な集まりがあった。そこには、ランベ、ポール・マルゴ、アキュル、プチ・タンヌ、リモナード、カルチエ・モラン、モルヌ・ルージュ、プレーヌ・デュ・ノールのプランテーションからやってきた奴隷たちが集まった。そして、一斉蜂起の打ち合わせが行われた。血による誓いを立てた後、ウンガン〔houngan。ヴードゥーの男性神官。亀甲括弧内は筆者の補足。以下も同じ〕であるブクマンは、その地域のプランテーションの代表者200人に向かって聖なる蜂起を起すよう勧説した。雷が轟くなか、女性神官〔マンボ manbo とする〕が大包丁を振り回しながら踊り、その大包丁を黒豚の喉元に突き刺した。蜂起した者たちはヴードゥーの身振りでブクマンに従うことを誓

¹ ハイチ革命史については、Jeremy D. Popkin, *A Concise History of the Haitian Revolution*, New York: Wiley-Blackwell, 2012 が小著ながら有益である。拙著『ハイチの栄光と苦難——世界初の黒人共和国の行方』(刀水書房, 2008年)ではハイチ革命のほか独立後の諸問題にも言及した。

約した。蜂起はブレーヌ・デュ・ノール、プチ・タンズ、カルチエ・モラン、リモナードへと拡がっていった。その蜂起のときにブクマンは死んだ。それ以来、彼は伝説的な人物となった²。



現在のハイチ



1791年8月の一斉蜂起の拡がりを示す地図

次はハイチの歴史家ダンテス・ベルギヤルド『ハイチ人民の歴史：1492～1952年』（1953年）中の一節。

1791年8月14日の夜、ブレーヌ・デュ・ノールのモルス＝ルージュに位置するボワ・カイマンと呼ばれる森のなかで、奴隷たちの大きな集まりが持たれた。その目的は一斉蜂起の最終的なプランを決めることだった。集まりには農園を代表して約200人のコマンドゥール〔奴隷監督〕が集結した。集まりを主宰したのはブクマンという名の黒人で、彼は熱烈なる言葉で集まった者たちを奮い立たせた。誓約をして閉会するに先だって感動的な儀式が行われた。激しい雨が降り雷が轟き稲妻が走るなか、長身の黒人女性が中央に現われた。彼女は手に持った鋭利なナイフを頭上でぐるぐる回し、髑髏の舞いを踊り、アフリカ風の唄を歌った。みんなが顔を地面に伏してその唄について歌った。黒豚が引き出され、彼女はナイフで黒豚の腹を抉った。黒豚の血が木桶

² Jean-Paul Duviols / Pedro Ureña-Rib, *Dictionnaire culturel des Caraïbes*, Paris: Editions-Ellipses, 2009, pp. 48-49.

に集められ、泡立つ血がみんなに配られた。この女性神官が合図すると、みんなが跪き、蜂起の首領と宣せられたブクマンの命令に絶対服従することを誓った。ブクマンはジャン＝フランソワ・パピヨン、ジョルジュ・ピアスー、ジャン・ビュレを副官にすると宣言した³。

「カイマン森の儀式」に関する二つの叙述は、細部では差異があるものの、次の点では共通している。——1791年8月14日に、ヴードゥーの神官であるブクマンの主宰のもと、サン＝ドマング北部のカイマン森に参集したプランテーションを代表する200人の黒人奴隷たちは、女性神官が生贄に殺した黒豚の血を呑みかわすなどのヴードゥー・セレモニーを行い、同時に一斉蜂起の誓約がなされた。

2点補足する。一つはブクマンについて。名前はブクマン・デュッティ(Boukman⁴ Dutty)といい、イギリス領ジャマイカで生まれた黒人奴隷だったが逃亡してサン＝ドマングに渡り、当時はクレマンなる人物が所有するプランテーションの御者で、ヴードゥーの最高位の神官でもあったとされている。また、ブクマンが「蜂起を起こすよう勸説した」「熱烈な言葉」については、エラルル・デュメールによって1820年代にハイチ北部で収集された伝聞が定説になっている。

我らに光をもたらず太陽を創造し、波を起こし、嵐を鎮める神は雲の陰からでも我らを見守りたもう。神は白人の行ないのすべてを知りたもう。白人の神は悪事を唆すが、我らの神は、我らに善行を求め、不正への復讐を命じたもう。神は我らの戦いを導き助けてくださるであらう。我らの涙の源泉である白人の神の象徴〔十字架〕を捨て、我らの胸に語りかける自由の声に耳を傾けよ⁵。

³ Dantes Bellegarde, *Histoire du peuple haïtien, 1492-1952*, Port-au-Prince: Edition Fardien, 1953, p. 53.

⁴ Bookman と綴られることもある。彼は識字者で読書を好んだとされる。

⁵ Hérard Dumesle, *Voyage dans le nord d'Haïti, ou révélation des lieux et des monuments historiques*, Les Cayes: Imprimerie du Gouvernement, 1824, pp. 85-90.

もう一つの補足は叙述に出てくる「女性神官」「長身の黒人女性」について。エティエンヌ・シャルリエは家系資料の調査から、アフリカ人女性とコルシカ出身の男性との間に生まれ、名前はセシル・ファティマン（Cécile Fatiman）だったとし⁶、この推定が今日も継承されている。



ブクマン・デュッティ



セシル・ファティマン

このように、ハイチ革命＝独立の発端となった出来事とされて切手の図柄にも使われている「カイマン森の儀式」だが、かねてから、その実在を疑問視する研究もあった。一例を挙げれば、ガブリエル・ドゥビヤンは『サン＝ドマングの植民者と革命』（1953年）において「大がかりな陰謀として8月14日に行われたことを示す信じるにたる証拠はない⁷」としている。

ハイチ史とりわけ植民地時代やハイチ革命の研究には特別の困難がある。それは利用できる史料に大きな制約があることであり、決定的なのは革命を担った黒人奴隷たちが書き残した史料が得られないことである。彼らは自身の言葉を文字にできなかったからであり、ガヤトリ・チャクラヴォルティ・スピヴァクの「サバルタンは語ることができるか⁸」の擧に倣えば、

⁶ Etienne Charlier, *Aperçu sur la formation de la nation haïtienne*, Port-au-Prince: Presses Libres, 1954, p. 49.

⁷ Gabriel Debien, *Les colons de Saint-Domingue et la Révolution. Essai sur le club Massiac, août 1789-août 1792*, Paris: Librairie Armand Colin, 1953, p. 333.

⁸ Gayatri Chakravorty Spivak, “Can the Subaltern Speak?” in: Cary Nelson / Lawrence Grossberg [eds], *Marxism and the Interpretation of Culture*, Urbana: University of Illinois Press, 1988, pp. 271-313. 上村忠男訳『サバルタンは語るすることができるか』（みすず書房, 1998年）

「黒人奴隷たちは語るができない」のである。

フランスはインフラの整備を顧みなかったが、「とにかく人間は、賢くなると反乱を起こす」として教育も度外視した。そのため、特殊なケースは別として、大多数の黒人奴隷たちはフランス語の識字能力を持たない。植民地時代から今日に至るまでハイチ人のコミュニケーション手段となったのはアフリカの諸言語とフランス語の混成語であるハイチ・クレオール語である。例えば、1804年の『ハイチ独立宣言』はフランス語とクレオール語の両方が用意され、国民に伝えられたのは口頭によるクレオール語であった。クレオール語による『独立宣言』は残されていない。正書法が未確立で文字化できなかったのである。クレオール語は1961年にフランス語と並ぶ公用語となり、1987年には憲法にも明記された。だが今も識字率は低い。『ワールド・データ・アトラス』によれば2016年で15歳以上の識字率は60.7パーセントである。また『世界子供白書』によれば子供の就学率は初等教育で50パーセント、中等教育で19パーセントにすぎない。

ハイチ革命には今なお不明な点が少なからず残されている。史料上の制約を如実に示すのが、ほかならぬ「カイマン森の儀式」についてである。「カイマン森の儀式」に参集した黒人奴隷たちの証言があれば「事実」を確定できるはずだが、その証言が得られないのである。

さらに、ハイチの歴史家ミシェル＝ロルフ・トルイヨが『過去を沈黙させる——権力と歴史の生産』(1995年)で鋭く指摘したように、「ハイチ革命は想像することのできない(unthinkable)特異な性格のものとして歴史に書き込まれた⁹⁾」という事情が加わる。

以下に、ハイチ革命＝独立史が周辺世界によって無視・隠蔽・排除される様をやや詳しく述べる¹⁰⁾。

⁹⁾ Michel-Rolph Trouillot, *Silencing the Past: Power and the Production of History*, Boston: Beacon Press, 1995, pp. 73-74.

¹⁰⁾ ハイチ革命＝独立に対する周辺世界の反応については浜『カリブからの問い——ハイチ革命と近代世界』(岩波書店、2003年)184-195頁で詳述した。

奴隷制の下で搾取され虐待されてきた人びとにとって、ハイチは奴隷解放のシンボルだった。例えば、1820年代アメリカ合衆国の自由黒人のなかでもっとも戦闘的で傑出した奴隷制反対論者とされるデイヴィッド・ウォーカーは、『訴え』（1829年）のなかで「黒人の栄光と圧制者どもの恐怖の国ハイチ」に熱い共鳴を表明した。だが、植民地当局の報告、帰国や亡命によって避難したフランス人植民者たちが伝えたのは、下の図に描かれるような「暴徒」「破壊」「殺戮」という「黒禍」だった。



サン＝ドマングの黒人奴隷蜂起を伝える当時の図

フランシスコ・デ・ミランダやシモン・ボリーバルなど、19世紀初頭に相次いだラテンアメリカ独立運動の主な担い手は植民地生まれの白人であるクリオーリョだったが、彼らは「サン＝ドマングの二の舞」に対する警戒と黒人を主体とする「ハイチ型」の国家形成に対する反撥を隠さず、エルンスト・ベルナルダンによる巧みな表現を借りれば、ハイチを「どんなことをしてでも転移を食い止めなければならない癌¹¹」とみなして忌避し、隔離した。また後の時代になると、頻発するクーデタや独裁政治による政情不安、「世界の最貧国の一つ」「破滅に瀕した国」「生ける屍の共和国」などと形容される困難な国情や、ヴードゥーを「おぞましき暗黒呪教」とみなす蔑みの眼差しも加わって「孤立国」化がいつそう強まることとなった。フランス人にとって、プランテーションに緊縛され嚴重に管理されてい

¹¹ Ernst A. Bernardin, *L'espace rural haïtien, bilan de 40 années d'exécution des programmes nationaux et internationaux de développement, 1950-1990*, Paris: L'Harmattan, 1993, p. 68.

るはずの黒人奴隷が一斉に蜂起し、あまつさえ植民地帝国から離脱して独立国家を創るといったことは青天の霹靂、まさに「想像することのできない」というよりも「想像したくない」悪夢であった。驚天動地の出来事を為政者の誤算、悪意を抱く外国人による教唆・煽動、「自由・平等」というフランス革命の理念の負の作用などで説明することも試みられたが、つまるところ忌まわしい出来事として黙殺し忘却することとなった。

そのような風潮は、ハイチ革命が起こる前の1770～80年代に黒人奴隷制を批判するだけでなく廃止を展望し、「不死身の黒人」による「新世界の復讐」を予見したルイ＝セバスティアン・メルシエ、あるいは「けっしてクラッススにまみえることのない新しいスパルタクス」——ローマ共和政末期(紀元前73～71年)に剣闘士奴隷の反乱を指揮したが、マルクス・リキニウス・クラッスス率いるローマ軍に敗れて死刑となった歴史上のスパルタクスとは違って、奴隷解放を成就するスパルタクス——の出現が不可欠であり不可避でもあることを予見し待望したドゥニ・デイドロやギヨーム＝トマ・フランソワ・レナールの論説を封印することにつながった¹²。

ハイチ革命＝独立の注目すべき知的インパクトはフランスの外で現れた。ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲルである。彼は『精神現象学』(1807年)のなかで「支配と隷属の弁証法」または「主奴の弁証法」と呼ばれる論説——奴隷主は支配者の地位を確保することで、生命と自由・自立を獲得できているように見えるが、実は奴隷主は奴隷のおかげで生命を維持できているにすぎず、自由と自立も奴隷を抑圧するという不自由な関係によって成り立つものでしかない。しかるに、生命と自由・自立に至る真の可能性は、むしろ生命の保障もなく自由も自立も奪われているかに見える奴隷の方にこそある——を書いた。この、既成の価値秩序のなかで抑圧されている人びとを復権しようとする「絶対的転倒」の意識は、レイシズムと剥き出しの暴力によって人間を管理し抑圧する最悪のシステ

¹² 詳しくは、浜『『両インド史』における歴史認識の諸問題』(『学園論集』157号, 2013年9月)

ムである奴隷制度のもとで支配され虐待されてきた黒人奴隷における解放主体形成を背景とする一大民衆革命の所産として、先駆的に奴隷解放と独立を成就したハイチ革命に触発されてのことであった¹³。

ハイチ革命と同時併行で展開して相互に影響しあっていたフランス革命を研究するフランスの歴史家たちは、大西洋黒人奴隷貿易や奴隷制度あるいはハイチ革命や植民地主義といった問題を永らく等閑視してきた¹⁴。その端的な証拠は「フランス革命 200 周年」（1989 年）を機に刊行されたフランソワ・フュレとモナ・オズーフの共編による『フランス革命事典』に見ることができる。初版（1988 年）にはなかった「サン＝ドマングの革命」の項目が第 2 版（1992 年）で追加されたが、その執筆者はイタリア人でミラノ大学のマッシミリアーノ・サントロというフランス革命研究でもハイチ革命研究でもまったく無名の人物だった¹⁵。

アリサ・ゴールドスタイン・セピンウォールは論文「サン＝ドマングの妖怪」（2009 年）で、フランスの歴史家がハイチ革命を研究してこなかった理由を、米国の歴史家と対比しながら 4 点指摘している。①米国では「人

¹³ ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲル、長谷川宏訳『精神現象学』（作品社、1998 年）129-138 頁。Susan Buck-Morss, *Hegel, Haiti, and Universal History*, Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 2008.

¹⁴ ただし、他に先駆けていた歴史家がいたことを敬意を込めて付記する。イヴ・ブノ Yves Benot (1921~2005 年) である。『フランス革命と植民地の終焉 1789~1794 年』(*La Révolution française et la fin des colonies, 1789-1794*, Paris: La Découverte, 1987, 2004), 『ナポレオン時代の植民地主義の狂気』(*La démence coloniale sous Napoléon*, Paris: La Découverte, 1992) が代表作。「イヴ・ブノ、反植民地闘争の歴史家」(Yves Benot, historien des luttes anticoloniales) の墓碑銘を表題にして追悼シンポジウム (2005 年 10 月 21 日) が行われた。

¹⁵ François Furet / Mona Ozouf, *Dictionnaire Critique de la Révolution française, Evènements*, Paris: Editions Flammarion, 1988, 2^e éd., 1992, p. 274. 河野健二／阪上孝／富永茂樹監訳『フランス革命事典 II』（みすず書房、1995 年）128 頁。

種」問題や黒人奴隷制の問題を「国内」に抱え、南北戦争という内戦をと
おして奴隷解放を実現したが、フランスの場合は黒人奴隷制もハイチ革命
も大西洋を越えた遠い「国外」での出来事だった。②ハイチ革命に付きま
とうのはフランス植民地帝国を崩壊させた負のイメージであり、これに第
二次世界大戦後のインドシナやアルジェリアの独立戦争での敗北の記憶も
重なって、脱植民地化のトラウマに苛まれる。③カリブ海域を専門とする
歴史家たちは植民地時代のハイチや黒人奴隷制について研究することが
あっても、ハイチ革命にまでは及ばない。④大学を含めた学校教育のカリ
キュラムから黒人奴隷制史もハイチ革命史も除外されてきた。けだし、ハ
イチは近づくのが忌避される「妖怪 specter」なのである¹⁶。

フランス人にとってハイチは「記憶の空隙」である。その結果（あるいは原因でもある）次のような現象が起こる¹⁷。

- ・ハイチをタヒチと取り違える国民が少なくない。
- ・ハイチでフランス語が公用語になっているのは何故かが分からない。
- ・パリにはカナダやマルティニク、グアドループなどかつてのフランス領植民地に由来する街路名が多数あるが、ハイチに因むものは皆無である。
- ・2000年にジャック・シラク大統領は、ハイチの東隣にあるドミニカ共和国の記者から「窮乏するハイチに対する旧宗主国で裕福なフランスの経済援助の在り方」について問われて、「厳密に言えばハイチはフランスの植民地ではなかった」と答えた。

¹⁶ Alyssa Goldstein Sepinwall, “The Specter of Saint-Domingue: American and French Reactions to the Haitian Revolution”, in: David Patrick Geggus / Norman Fiering [eds.], *The World of the Haitian Revolution*, Indianapolis: Indiana University Press, 2009, pp. 317-338.

¹⁷ Marcel Dorigny, “Aux origins: l’indépendance d’Haïti et son occultation”, dans: Pascal Blanchard / Nicolas Bancel / Sandrine Lemaire [sous la direction de], *La fracture coloniale. La société française au prisme de l’héritage colonial*, Paris: La Découverte, 2005, pp. 45-55.

フランスの革命史研究者がハイチ革命や植民地問題に本腰を入れるようになったのは最近のことである。ピエール・セルナ「フランス革命史研究所」(IHRF: Institut d'Histoire de la Révolution Française)のメンバー5名の共著になる『フランス革命は何をしたのか』(2012年)はフランス革命史研究の再検討だが、フレデリック・レジャンが「フランス革命は植民地によって何をしたのか」の章で「奴隷制問題、植民地問題の視点が不可欠である」ことを縷々論じている¹⁸。レジャンはアフリカ系の出自で1969年グアドループ(1635年からフランス領植民地。1946年にフランス海外県。未独立)生まれの気鋭の研究者で、『フランスとその奴隷たち——植民地化から奴隷制廃止まで(1620~1848年)』(2007年)¹⁹においてフランス領植民地の黒人奴隷制の歴史を概観し、フランス革命期についても豊富な叙述を与えていた。これは研究史上画期的なことである。

こうした研究動向と表裏をなして、黒人奴隷貿易や植民地支配の問題をめぐる次のような国内的・国際的な政治状況の展開があった²⁰。

2001年5月10日、フランスの上下両院は、フランス海外県ギアナ選出の議員クリスチアーン・マリー・トビラの発議を受けて、かつての大西洋黒人奴隷貿易と黒人奴隷制度を「人道に対する罪」(crime contre l'humanité)と認めるとする法案を可決した。

同年8月31日から9月8日まで、南アフリカ共和国のダーバンで国連主催による「人種主義、人種差別、外国人排斥および関連のある不寛容に反対する世界会議」が開催された。これには163カ国の政府代表ら約2300名が参加し、非政府組織の代表も約4000名が参加してフォーラムを開催した。議論の焦点は過去の奴隷貿易と奴隷制度の問題だったが、議論の結

¹⁸ Jean-Luc Chappey / Bernard Gainot / Guillaume Mazeau / Frédéric Régent / Pierre Serna, *Pour quoi faire la Révolution*, Marseille: Agone, 2012. Régent, "Pour quoi faire l'histoire de la Révolution française par les colonies?"

¹⁹ Régent, *La France et ses esclaves. De la colonisation aux abolitions (1620-1848)*, Paris: Hachette, 2007.

²⁰ 浜前掲『ハイチの栄光と苦難』128-132頁で詳述した。

果、「宣言と行動計画」で大西洋奴隷貿易と奴隷制度は「人道に対する罪」(crime against humanity)であったと宣言された。

2005年1月、ユベール・コラン・ド・ヴェルディエール駐アルジェリア大使は、1945年5月にアルジェリアのセティフで独立を求めるデモをきっかけにして起こった「暴動」に対するフランス軍による武力鎮圧で多数のアルジェリア人が虐殺された(その数は、アルジェリア側が4万5千人と主張しているのに対して、フランス側は1万5千人ないし2万人と推定している)事件について言及して、これを「許しえない悲劇」と認め、フランスとアルジェリア両国は歴史の真実を掘り起こす「記憶の共同作業」に取り組むとの合意がなされた。

同年7月には旧フランス領植民地のマダガスカルを訪問したジャック・シラク大統領が、1947年に起こった反植民地暴動に対する血の弾圧事件に触れて、これを「植民地体制の衝動によって引き起こされた容認しがたい性格」を持っていたと認め、「正当化できない理由で命を落とした人びとの記憶は誰も消し去ることはできない」として「事実を掘り起こし、心の平安をもたらしうる記憶の作業」に取り組むことを約束した。

このような反省の弁や「記憶の作業」は一般に「過去の克服」と言われる問題につながる。「過去の克服」とは、もともとはナチス・ドイツによる暴力支配が引き起こしたおぞましい帰結に対して戦後のドイツが行ってきた戦争責任や戦争犯罪の追及や反省、謝罪、戦後補償などのさまざまな取り組みを包括する言葉だが、それは、ほかの歴史事象にも敷衍できるものである。フランスは遅まきながら戦後60年になって「過去の克服」に取り組み始めたのである。

前後するが同年2月23日、旧植民地からフランスへの帰還者に対する補償を定めた法律が制定され、そこに「海外領土とりわけ北アフリカにフランスが存在したことの積極的な役割」を学校教育で教えるという主旨の条項が盛り込まれた。この条項は、歴史家や市民からの削除要求や社会党系の議員による法案の提出などの紆余曲折を経た後、翌2006年1月31日に削除された。このことは、植民地支配は全面否定すべきものではなく、

良い面があったのだとする心性が根強く存在することを浮き彫りにした。

2005年10月末からフランス各地で大規模な「暴動」が起り、日本のメディアも連日のように報道した。発端はパリ郊外セヌ・サンドゥニ県のクリシーでアフリカ系移民の少年2人が警官に追われていると思込み変電施設に逃げ込んで感電死したことだった。これを知った少年の仲間たちが警官に投石したり車に放火したりするなどの騒乱を引き起こした。これが各地に飛び火して、11月初旬までに全国300の都市に広がり、燃やされた車は6千台以上、拘束された若者は1500人以上にのぼった。

フランスは第二次世界大戦後の労働力不足を補うために旧植民地から多数の移民を受け入れた。そしてフランスに定住した移民たちの二世、三世の急増によって、その数は約500万人、総人口の約8パーセントを占めるに至った。だが、1970年代のオイル・ショックが転機となって移民の失業問題が深刻化し、それが教育や社会保障をはじめ宗教や文化などの問題とも重なり、「郊外問題」として顕在化した。植民地とえば、かつてはフランスからアフリカやアジアやラテンアメリカへの移民によって作られたのだが、今はその旧植民地から人びとがフランスに流れ込んできて、さながら「逆さまの植民地」と言うべき様相を呈るようになったのである。

「暴動」を伝えた報道のなかには「歴史的遺産に満ち文化の香り高いフランスというイメージからはほど遠いフランス社会の現実の一面を全世界に見せつけた」「フランス革命以来の理念である『自由・平等・友愛』を現実には裏切っている社会の実態を暴露した」とのコメントのほか、「植民地主義に対する深刻で根底的な反省を欠いてきたことのツケが噴出した」という論評もあった。それはフランス政府がとった対応に窺うことができる。ド・ヴィルパン内閣は11月8日、「暴動」を沈静化するために非常事態法の適用という強硬措置を発動し、治安問題を担当するニコラ・サルコジ内相に至っては「暴動」を起こした若者たちを「社会のくず」「ごろつき」呼ばわりし、「『掃除機』をかけて一掃する」とまで言い放った。

2006年1月30日、シラク大統領は、2001年にフランス議会が奴隷貿易と奴隷制度を「人道に対する罪」と決議した日である「5月10日」を「奴

隷制廃止の記念日」「奴隷制犠牲者追悼の日」とすると表明し、「奴隷制はヨーロッパ人によって犯された嫌悪すべき事象」であり「国家の偉大さは光だけでなく陰も含めたすべての歴史を認めることにある」と述べた。

こうした動向と表裏をなして、フランスの植民地主義に関する歴史研究が次第に活発になったのである。

日本では、山崎耕一が『フランス革命史の現在』(2013年)で今後の研究方向に触れて「浜忠雄が孤軍奮闘している状態である」奴隷制問題、植民地問題の視角からのフランス革命研究が重要であるとした²¹。また、竹中幸史は「フランス革命 200 周年」以後の日本における革命史研究を振り返りつつ次のような展望を示した。「これまで我われはフランス革命を、自由・平等・友愛の側面に注目してきた。しかしその陰で、近代フランスはハイチ独立を認めたとはいえ、かの地に賠償金支払いを課して『辺境』に固定し続け、またこれを梃子にして中米諸国の発展の機会を奪った。貧困、政情不安、麻薬を中心とする地下経済というハイチの現状は、フランス革命の不徹底による負の遺産でもある。私たちはフランス人でないがゆえに、この問題に強く踏み込むことができる。そしてまた日本人であるがゆえに、植民地の辺境化という問題を考えずに済ますことはできない。²²」

このように、フランスと日本におけるフランス革命研究の「本流」が奴隷制問題や植民地問題、ハイチ革命を重視するようになった。これまで「傍流」でしかなかったテーマが「本流」でもようやく市民権を得たということである。それにしても、フランスにおける長期にわたる研究の不在はハイチ革命の「事実」解明のネックとなったことは間違いない。

歴史研究では、どの時代、どの地域を対象にしても言えることだが、とりわけハイチ史では「事実 facts」と「記憶 remembering」と「表象 rep-

²¹ 山崎耕一／松浦義弘編『フランス革命史の現在』(山川出版社、2013年)

²² 竹中幸史「過ぎ去ろうとしない革命——フランス革命 200 周年以後の日本における革命史研究」(『歴史評論』765号、2014年1月)

resentation」と間の関係を見極めることが必要になる。この小論では、主として「カイマン森の儀式」を表象した絵画と歴史叙述のほか、「カイマン森の儀式」から200周年にあたる1991年に制作された4枚の歴史画を取り上げて、それらに見出されるハイチ人の歴史意識の特色に言及する。

1. 「カイマン森の儀式」の表象（絵画）

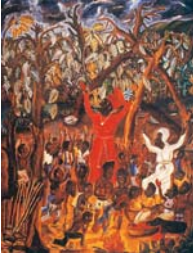
1943年に英語教育推進の戦時要員となった米国の水彩画家のデウィット・ピーターズがポルトープランスにアート・スクールと展示スペースと販売所とを兼ねた「サントル・ダール Centre d'art」（芸術センター）を開設した。1944年のオープン記念展示会には多くの絵が集められた。それらは作品を送った者には貧困なハイチの生活水準では考えられない高額のお金を貰えるそうだという情報が広まって送られてきたものであった。以来、ハイチ・アートは盛行を迎えることとなった。

セルデン・ロドマンの『アートが喜びである処』（1988年）は最初の40年間を詳述し²³、また、ロナルド・シーガルは『ブラック・ディアスポラ』（1995年）の一つの章（第33章：The Innocent Eye 無垢の眼）をハイチ人の芸術活動にあてている²⁴。

ハイチでは多くの画家が「カイマン森の儀式」を描いている。以下に11点の作品を示し、どのように表象されているかを見る。

²³ Selden Rodman, *Where Art Is Joy. Haitian Art: The First Forty Years*, New York: Ruggles De Latour, 1988.

²⁴ Ronald Segal, *The Black Diaspora. Five Centuries of the Black Experience Outside Africa*, New York: Farrer, Straus and Giroux, pp.396-406, 1995. 富田虎男監訳『ブラック・ディアスポラ』（明石書店、1999年）705-723頁。



㉑ デュードネ・セドル画



㉒ アンドレ・ノルミル画



㉓ カステラ・バジル画



㉔ ニコル・ジャン＝ルイ画



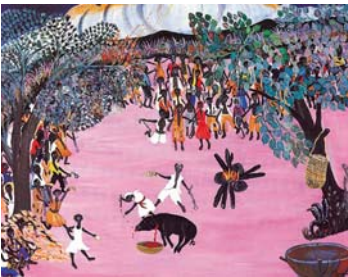
㉕ ダヴィッド・ボーブラン画



㉖ 作者不詳



㉗ 作者不詳



㉘ エルネスト・プロフェート画



㉙ ユルリック・ジャン＝ピエール画



①ユルリック・ジャン＝ピエール画



②ユルリック・ジャン＝ピエール画

筆者は①と②を拙著の文中や表紙カバーに掲載して、「カイマン森の儀式」についての説明を補強するのに活用した²⁵。

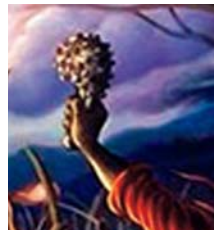
11点の作品には共通点がある。第1は集会でヴードゥーのセレモニーが行われたことが示されていることである。それは次の諸点で分かる。画面中央に男性神官のブクマン・デュッティ、その横に女性神官のセシル・ファティマン。生贄となって殺され、その血が参集者に配られる黒豚。道路や十字路の守護霊で霊界の門番役を司る「レグバ legba」が宿るとされる聖なる大樹「マプー mapou」。作品③と④に見られる地面に描かれた白色の紋様で、ヴードゥーの精霊を呼び出すために麦やトウモロコシの粉あるいは灰を用いて作られる「ヴェヴェ vévé」。中南米に広くみられる楽器マラカスにあたる「アソン ason」（英語訳は rattle）である。



③の「ヴェヴェ」



④の「ヴェヴェ」



⑤の「アソン」

²⁵ 浜『ハイチ革命とフランス革命』（北海道大学図書刊行会、1998年）、浜前掲『カリブからの問い』、浜前掲『ハイチの栄光と苦難』

ヴードゥー voodoo とは、簡潔に言えば、アフリカに起源をもつ 401 からなる精霊の信仰とキリスト教とが混淆してサン＝ドマングで新しく生まれた信仰である。だが、信仰であると同時に世界観、さらにそのような世界観を持つ人びとをも意味する（そのため筆者はヴードゥー教とはせず、単にヴードゥーと表記している）。ヴードゥーの元になっているのはヴードゥン voudun で、西アフリカのギニア湾岸、現在のベニン（旧称ダホメ）共和国に住むフォン語を話す人びとの言葉で「神」「精霊」「生命力」を意味する。アフリカ人たちはこの信仰を持ってサン＝ドマングに連行された。一方、フランスはキリスト教（ローマ・カトリック）を「唯一の宗教」として強制し、ヴードゥンを「邪教」と見なして禁止した。しかし黒人奴隷たちはヴードゥンを捨て去らず、故地アフリカから強制的・暴力的に切り離され、生きて再び戻る希望を持たない黒人奴隷たちは故国や祖先の霊に救いと生命力の源を求め、死後における「魂の帰郷」に心の平安を求めた。そこで、黒人奴隷たちは心の拠り所であるヴードゥンを信仰し続けると同時に、キリスト教を拒否せず、これとの習合を図ったのである。ヴードゥーの祭壇にはイエスとマリアを描いた聖母子画やイエスの像などが置かれている。聖母マリアには処女と母と老婆の三つの顔を持つエルズリ（またはエジリ）を、キリスト教の聖人たちには、交信と十字路の神レグバ、蛇神ダンバラ・ウェド、その妻で虹の神アイダ・ウェド、海の神アグウェ、植物の神ロコなどのヴードゥンの聖人たちを当てたのである。そして、ヴードゥーの精霊の祝日の多くもカトリック暦に依っている。端的に言えば、ヴードゥーの特徴はハイブリッド性にある。



ヴードゥーの祭壇



エルズリ

「カイマン森の儀式」の表象（浜）

全作品に共通する第2点は一斉蜂起を誓う場だったことが描かれていることである。「カイマン森の儀式」が「カイマン森の誓い」(Serment du Bois Caiman)ともされる所以だが、そのことは多くの人物が鈍、普通、サトウキビを刈るのに用いるナイフを握り振り上げていることに示されている。



㉔の部分



㉕の部分

作品によって描き方が異なることにも気づく。一つはブクマンの服の色。㉕は赤と青の2色だが、㉔と㉖は白、㉗は赤を使っている。参集者の服装も、㉗や㉖の場合は各自が不揃いなものに対して、㉔は全員が白、ユルリックの絵ではどれも上半身裸体の者が多い。また、カイマン森の空間が㉗と㉖は狭く閉鎖的なものに対して、㉔㉕㉖㉗㉘は広く開放的に描かれている。そこで問題になるのは、これらの作品は「事実」を忠実に再現しているのか、何を根拠にしてこうした描き方になったのか、ということである。



「カイマン森ようこそ」のアーチと8月14日の記念野外劇

「カイマン森の儀式」は、ハイチ革命＝独立の発端となった出来事として公認されて切手の図柄に採用され、多くの絵画や歌の主題となり、毎年8月14日には記念の野外劇が演じられるだけに、「表象」と「事実」との関係を吟味することは不可欠である。

11の作品はいずれもドラマティックな情景を描いている。ユルリックの作品はとりわけそうであって、実に躍動的でエキサイティングである。黒人奴隷制の歴史上最初の廃止は、奴隷制を持ち込んだヨーロッパのイニシアティヴによってではなく、支配と抑圧のもとにおかれたハイチの黒人奴隷たちによる一大民衆革命の所産として実現された。ハイチ人は奴隷制のもとで搾取と抑圧を甘受し呻吟しつづける客体ではけっしてなく、自らの意志によって自らを解放する主体的存在であることを厳然たる事実をもって示した。これほど劇的なかたちで、周辺世界にあって支配され収奪されてきた民衆のエネルギーの爆発が中枢世界を突き動かし、さらに進んで自らの国家を樹立するに至るといったことは歴史上に先例のない出来事である。そのような視点に立てば、ハイチ革命=独立の起点となった「カイマン森の儀式」をこのように描くのも頷けるところではある。だが、「カイマン森の儀式」は実際にそのような情景だったのだろうか。

なかでもユニークなのは、やはりユルリック・ジャン＝ピエールの「カイマン森の儀式」3部作というべき作品①①①①である²⁶。3作品とも構図と群衆はジャック・ルイ・ダヴィッド画『球戯場の誓い』(1791年)によく似ている。「球戯場の誓い」は1789年6月20日、三部会の第三身分議員がヴェルサイユ宮殿の球戯場に集結して、憲法の制定まで解散しないことを誓い合った、フランス革命の開始を予兆する出来事であった。



ダヴィッド『球戯場の誓い』



ハイチ革命軍の旗



現在のハイチ国旗

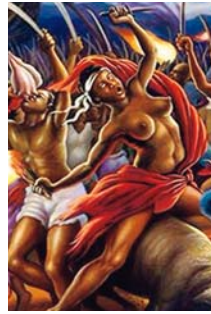
²⁶ Marc A. Christophe, "Ulrick Jean-Pierre's Cayman Wood Ceremony" *Journal of Haitian Studies*, Vol. 10, No. 2, Bicentennial Issue (Fall 2004), pp. 51-54.

また、ブクマンの服の色——ズボンの青と上着の赤——をハイチ革命期以来の旗や国旗（青と赤の2分割）と同じ色で描いている。そうすることで、「カイマン森の儀式」がハイチ建国の発端となった出来事であり、現在と直結していることを表現しているのであろう。

印象的なのは、女性神官のファティマンが①と①ではブクマンの脇役のように目立たぬ大ききで描かれているのに対して、㊦ではブクマンと並ぶ主役のように描かれていて、それはウジェーヌ・ドラクロワの名画『民衆を率いる「自由」』（1830年）の「自由の女神」（マリアンヌ）を彷彿とさせるものになっていることである。



ドラクロワ『民衆を率いる「自由」』



㊦の部分

革命時代のフランスでは「自由」や「共和国」は「マリアンヌ」像によってシンボライズされた。〈Marianne〉は〈Marie + Anne〉、つまり聖母マリアとその母アンナの名を繋げたものである。崇敬の対象である聖女が「自由」の象徴とされたのだが、当時のフランス女性が現実に「自由」を享受していたのではなく、「共和国」という政治の主体とされていたのでもない。それにもかかわらず、「自由」や「共和国」を女性像で表すのはなぜか。リン・ハントは「女性の姿が図像に見られたことは、女性が政治の主体とされていたのでもないが故に却って、自由の理想を表現するために選ばれたという逆説があった²⁷」と説明している。

²⁷ Lynn Hunt, *The Family Romance of the French Revolution*, Berkley:

ユルリックが『民衆を率いる「自由」』のパロディーのように描いた意図は不明である。ハイチ革命において女性が重要な役割を担ったのは確かなのだが²⁸、やはり、現実には「自由」を享受していたのではなく政治の主体とされていたのでもない。1805年のハイチ最初の憲法は「ハイチの市民はみな兄弟であり法の下で平等である。いかなる称号、地位、特権もない」(第3条)と定めるが、「良き父親、良き息子、良き夫、とりわけ良き兵士でないものはハイチ人の名に値しない」(第9条)とも規定する。つまり男性のみの市民権であり、明文規定はないが女性は市民権を持たない。女性参政権が実現したのは1950年、国政レベルでの最初の実施は1957年の大統領選挙であった²⁹。むしろ、ユルリック自身の「自由の理想」やジェンダーフリーの信条を投影させたアレゴリーとみるべきかもしれない。

2. 「カイマン森の儀式」の表象（歴史叙述）

「カイマン森の儀式」についてのもっとも古い記録は、フランスの軍人でサン＝ドマング北部に居住したアントワーヌ・ダルマが1793年から94年にかけて書いたと推定され、1814年に出版された『サン＝ドマング革命史』に見られる。詳細な引用は避け、要点を示す。

ダルマは二つの別々の集まりがあったとする。一つは8月14日にモルヌ・ルージュにあるルノルマン所有のプランテーションで行われて

University of California Press, 1992, pp. 82-83. 西川長夫／平野千果子／天野知恵子訳『フランス革命と家族ロマンス』（平凡社、1999年）149頁。

²⁸ 例えば、Michel Hector / Laënnec Hurbon [sous la direction de], *Genèse de l'État haïtien (1804-1859)*, Paris: Editions de la Maison des sciences de l'homme, 2009, pp. 313-319.

²⁹ 皮肉なことに、この選挙で大統領に当選したのは、後に恐怖の独裁政治を行ったことで悪名高いフランソワ・デュヴァリエであった。詳しくは浜「ハイチ革命再考」（『年報 新人文学』[北海学園大学文学研究科] 7号、2010年12月）

蜂起の計画が練られたもの。もう一つは蜂起を実行に移す前日の8月21日にシヨワズール侯爵所有のプランテーションのカイマンと呼ばれた森の未耕地のなかで多数の黒人が集まって行われた祝祭と生贄の儀式である。したがって「カイマン森の儀式」と言われるものは、ルノルマン所有のプランテーションで行われたものではなくて、そこから東へ約10キロメートル離れた平野、今でもカイマンと呼ばれている場所で行われたものである³⁰。

次に古い記録はサン＝ドマングの奴隷反乱を調査すべくフランスの国民公会から派遣されたガラシ＝クーロンが共和暦第5（1797）年に作成した『サン＝ドマングの騒擾に関する報告』であり、次のように書かれている。

8月11日にシャボォ氏所有のプランテーションに放火したとの容疑で8月20日に逮捕された黒人奴隷のフランソワは次のように証言した。— 8月14日の日曜日、モルヌ＝ルージュにあるルノルマンのプランテーションで黒人奴隷の代表者の集まりが持たれた。そこにはポール＝マルゴ、ランベ、アキュル、プチ＝タンヌ、プレーヌ・デュ・ノール、カルチエ・モラン、モルヌ＝ルージュなどのプランテーションからそれぞれ二名の代表が集まった。目的は、かねてから計画していた蜂起の日取りを決めることだった。はじめ、当日の夜に決行するという意見が強かったが、準備に時間が必要だということで、8月22日の夜にすることになった³¹。

ダルマが二つの別々の集まりがあったとしているが、ガラシ＝クーロンの『報告』に書かれる集まりは蜂起の計画が練られた8月14日の1回のみで、「カイマン森」も「ヴードゥー」も「儀式」も記載はない。ただ、ガラシ＝クーロンがあげる地名をもとに計算すると、集合地を中心に半径25ないし30キロメートルに及ぶ広範囲から集まったことが判る。

³⁰ Antoine Dalmas, *Histoire de la révolution de Saint-Domingue*, Paris, 1814.

³¹ Garran-Coulon, *Rapport sur les troubles de Saint-Domingue*, 4 vols., Paris, l'an V t.2, pp. 211-212.

すでに書いたように、ドゥビヤンが「信じるにたる証拠はない」として「カイマン森の儀式」の史実性を疑問視したが、レオン＝フランソワ・ホフマンは「そんな儀式はなかった。19世紀になって作りあげられたフィクションにすぎない³²」とまで断言する。だが、「カイマン森の儀式」の存在を否定する論は少数であり、多くの史家は実在したとみている。ただし、細部まで一致しているわけではない。エメ・セゼールとシリル・ライオネル・ロバート・ジェームズは「カイマン森の儀式」の実在を認めたとうえで、その日付を8月22日としている³³。

これに対して、キャロライン・E・フィックは『ハイチの形成——下からのサン＝ドマング革命』（1990年）において、8月14日の「カイマン森の儀式」は実在したし、それはヴードゥーのセレモニーの中で蜂起の誓約が行われた、と結論している³⁴。「はじめに」で引用した『カリブ文化辞典』およびダンテス・ベルギャルドの理解と同じである。

しかるにデイヴィッド・パトリック・ゲッグスは「ハイチのアイデンティティを創造するうえでシンボリックな重要性を持つ出来事」である「カイマン森の儀式」を史実として確定することには慎重でなければならないとする³⁵。

³² Léon-François Hoffmann, “Le vodou sous la colonie et pendant les guerres de l’indépendance”, *Conjonction: Revue franco-haïtienne*, no.173, 1987, p. 122.

³³ Aimé Césaire, *Toussaint Louverture. La Révolution française et le problème colonial*, Paris: Présence Africaine, 1962, p. 178; Cyril Lionel Robert James, *The Black Jacobins. Toussaint L’Ouverture and the San Domingo Revolution*, 1938, 2nd ed., New York: Vintage Books, 1963, p. 87. 青木芳夫監訳『ブラック・ジャコバン——トゥサン・ルヴェルチュールとハイチ革命』（大村書店、1991年、増補新版、2002年）94頁。なお、青木はこの箇所「儀式があったのは実際は14日」と注記している。

³⁴ Carolyn E. Fick, *The Making of Haiti. The Saint-Domingue Revolution from Below*, Knoxville: University of Tennessee Press, 1990, pp. 91-95.

³⁵ David Patrick Geggus, “La Cérémonie du Bois Caïman”, in: Laënnec Hurbon [sous la direction de], *L’insurrection des esclaves de Saint-Domingue, 22-23*

「カイマン森の儀式」は実際に行われた。しかし、これまで書かれてきたことの多くは信頼できない。どの記述も正しい日付を与えていないように思われる。多くの記述は場所についても混乱している。そこで起こったことについての記述は正しいとは思えない。1791年の蜂起におけるこの儀式の役割については見直しが必要である。

ゲッガスが依拠したのはダルマの『サン＝ドマング革命史』である。ゲッガスは次のように指摘する。カイマン森で「ヴードゥーの儀式」が行われたのは8月14日にルノルマン所有のプランテーションで行われた集まりから1週間後の8月21日の夜、つまり8月22日の夜に決行された一斉蜂起の前日と推定する。そして、こう結論する。

「カイマン森の儀式」の重要性は過大視されてきた。それは8月21日にルノルマン所有のプランテーションで行われた集まりと混同されたためである。1791年の蜂起を考えるうえでは蜂起の計画が練られたルノルマン所有のプランテーションで8月14日に行われた集まりの方がより重要である。蜂起を勧説するブクマンの言葉はそこで述べられたのであって、カイマン森ではない。したがって、ハイチにおいて国民的記念日として祝賀されるのに相応しいのは8月14日である。ただし、それは「カイマン森での儀式」の記念日としてではなく、またヴードゥーとも無関係にである。

先述のようにフィックは、1990年の著書では、8月14日に「カイマン森の儀式」が行われ、それはヴードゥーの集まりだったとしていたのだが、2000年の論文「サン＝ドマング革命——1791年8月22日の蜂起からハイチの国家形成まで」では、ゲッガスの論文に依拠して「カイマン森の儀式」は8月14日のモルス・ルージュでの集会の数日後（ゲッガスのように21

août 1791, Paris: Editions Karthala, 2000, pp. 149-167. この論説は後に“The Bois Caïman Ceremony”, in: Geggus, *Haitian Revolutionary Studies*, Bloomington: Indiana University Press, 2002, pp. 81-92, 249-254 に英語版で再録された。

日とは特定していない)に行われた、と修正した³⁶。ゲッガスの研究に従うならば、「カイマン森の儀式」を8月14日に行われた「ヴードゥーの儀式」のなかで一斉蜂起のための計画が練られたものとする『カリブ文化辞典』やベルギャルドの文章は修正しなければならず、同様に筆者も旧著³⁷での叙述を修正しなければならないことになる。

最新の研究では前出のポップキン『ハイチ革命小史』(2012年)が重要である。この本は、2010年1月12日(日本時間13日)にポルトープランスとその周辺を襲った大震災の後に、勤務校であるケンタッキー大学で新設した講座「近代世界のなかのハイチ」の教科書として作成したものである。それは、学生たちに現在のハイチとハイチ国民についての理解を促すとともに、大震災からの復興を進めるにはハイチ革命の歴史、とりわけ独立のための闘争の記憶が不可欠であるとの認識に発している。ポップキンは「カイマン森の儀式」についてはゲッガスの所論をほぼ全面的に踏襲している。ただし慎重を期して「たぶん probably」「おそらく perhaps」「推定では supposed」「～らしい presumably」などの語を挿入している³⁸。

だがゲッガスの論説に異を唱える研究もある。クリントン・A・ハットンの『ハイチ革命のロジックと歴史的意義、ハイチ人の自由の宇宙論的ルーツ』(2005年)³⁹である。この本はハイチ革命における自由の意味を宇宙論的エトスや認識論的視点で発掘し再構築することを眼目としたものである。ハットンはゲッガスを「傑出したハイチ革命研究者」と評価するのだ

³⁶ Fick, “La révolution de Saint-Domingue. De l’insurrection du 22 août 1791 à la formation de l’Etat haïtien”, in: Hurbon [sous la direction de], *op. cit.*, pp. 55-74.

³⁷ 浜『ハイチ革命とフランス革命』110頁, 浜『カリブからの問い』35-51頁, 浜『ハイチの栄光と苦難』27-32頁。

³⁸ Popkin, *Op. Cit.*, pp. 37-38.

³⁹ Clinton A. Hutton, *The Logic and Historical Significance of the Haitian Revolution and the Cosmological Roots of Haitian Freedom*, Kingston: Arawak Publications, 2005.

が、ハイチ革命の発端を、8月21日の夜にカイマン森で行われた「ヴードゥーの儀式」とは区別して、8月14日にルノルマン所有のプランテーションで行われた一斉蜂起のための非宗教的な準備集会に求めるゲッガスの説明は論拠が不十分なだけでなく、ハイチ革命からヴードゥー的性格を希薄化させることにつながる、として異を唱えるのである。

ハットンの指摘には一理ある。ゲッガス自身が書いているように、8月14日の集まりで「ブクマンによる蜂起を勧説する言葉が述べられたのである」。これも先述のように、ブクマンはヴードゥーの最高位の神官とされた人物である。したがって、8月14日の集まりをヴードゥーとは無関係なものだったとするゲッガスの論説には無理がある。

ともあれ、この議論はハイチ革命の基本的性格の理解に関わってくる。ゲッガスもそうだが、ジェームズやセゼールなど多くの研究者はハイチ革命をトゥサン・ルヴェルチュールの名とともに語ってきた。そのトゥサンは敬虔なカトリック教徒ただだけでなく、カエサルの『ガリア戦記』やストア派哲学者エピクテトスの作品をはじめとする多くの書物、そして「けっしてクラッスにまみえることのない新しいスパルタクス」の文章が出てくるギヨーム＝トマ・フランソワ・レナールの大著『両インド史』などの啓蒙思想家の書物も読んでいたとも言われる。ヨーロッパ的な「知」の持ち主であったことから、そのようなトゥサンを指導者としたハイチ革命は、アメリカ独立革命やフランス革命とも性格を同じくする、いわば「ヨーロッパ型」の革命として理解されてきたのである。これに対してハットンはアフリカに起源をもつエートスとしてのヴードゥーの意義を強調するのである。「ヨーロッパ型」の革命に対比するなら、「アフリカ型」の革命とでも言えようか。

筆者は「ヨーロッパ型」か「アフリカ型」かといったような二者択一によってハイチ革命を説明することはできないと考える。

しばしば「ハイチ革命はフランス革命の影響のもとで起こった」と書かれることがある。例えばミシェル・ブルジョワは『ハイチ、神話か現実か——独立の200年、1804～2004年』（2014年）で、ハイチ革命を「フランス

革命の後継者」(l'héritière de la Révolution française) と捉え、ひとえにフランスの啓蒙思想や革命の影響を受けて起ったかのように叙述している⁴⁰。こうした言い方は不正確である。たしかに、ハイチ革命が起こったのはフランス革命のさなかのことであり、それ以降、ハイチ革命とフランス革命とは同時併行に展開することとなったから、フランス革命からの影響を無視することはできない。しかし、ハイチ革命の発端となった1791年8月の一斉蜂起はフランス革命との関係は薄かったのであり、ハイチ革命は「特殊な性格と固有の起源」を具えたものとして始まったのである。その「特殊な性格と固有の起源」を生み出したのが奴隷制植民地社会のなかで形成されたプランテーション・システム、クレオール語とヴードゥーであると考えられる。すなわち、数多の名もない奴隷たちによる集団的、組織的な行動を可能にしたのは、彼らが日常の生活と労働の場としていたプランテーション・システムそのものがすぐれて集団的、組織的、協働的な性格を持っていたという客観的な条件に加えて、互いの意思疎通を可能にするコミュニケーション手段としてのクレオール語を創出し、さらに連帯を生み出す精神的な絆としてのヴードゥーを共有していたという主体的な条件を重視しなければならない、ということである。

ハイチ革命はヴードゥー的性格を持つものとして開始された、だが、当初は黒人奴隷蜂起を静観していたトゥサンが合流したことでヨーロッパ的性格が加わり、それが革命の進行の過程で次第に強くなったと見るべきではないか、というのが目下の仮説である。その点はトゥサンとヴードゥーとの関係にも垣間見ることができる。トゥサンは少なくともハイチ革命の初期の時点ではヴードゥーを許容し、あるいはそのエネルギーに依拠しようとしたし、黒人大衆の方もトゥサンをそのような眼で見えていたと思われるのである。だが後になるとトゥサンとヴードゥーとの関係に亀裂が生じる。その点は、1801年7月8日にトゥサンの名によって公布された『フラ

⁴⁰ Michel Bourgeois, *Haïti, mythe ou réalité. Deux cents ans d'indépendance, 1804-2004*, Paris: L'Harmattan, 2014.

ンス領植民地サン＝ドマング憲法』に窺うことができる。この憲法では、ローマ・カトリックが「公に表明された唯一の宗教である」（第6条）と規定されたのであり、そのことは、この時期に至ってトゥサンがヴードゥーとの間に距離を置くようになったことを示唆しているのである。

元ハイチ大統領のジャン＝ベルラン・アリストイド、彼はカトリックの神父で「解放の神学」を奉じた人物だが、1991年9月の軍事クーデタでアメリカ合衆国へ亡命を余儀なくされる直前に日本のテレビ取材班のインタビューに応じて「ハイチ人にとってヴードゥーは文化の根源です。ヴードゥーを拒否することはできないのです」と語ったことがある。ハイチでは公式にはカトリックが90パーセント、プロテスタント10パーセントとされるが、「国民の全部がヴードゥーである」とも言われる。パリ在住のエロル・ジョシュエという名のヴードゥーの神官は「私はハイチ人であり、『カイマン森の儀式』がハイチ革命と独立の発端となったと信じている」とし、「カイマン森の儀式」は史実性の如何に関わらず自分たちヴードゥーとハイチ人のアイデンティティの原点である、と述べている⁴¹。

ともあれ、「カイマン森の儀式」については今なお「事実」を確定できていない。ロラン・デュボワは「『カイマン森』は今も成功した奴隷蜂起のシンボルであり続けている。ただし、細部までしかと突き止めることのできる出来事のシンボルとしてではなくて、^{スピリチュアル}神霊的かつ政治的な叙事詩のシンボルとしてである⁴²」とし、コートニー・ヤングは「『カイマン森の儀式』を描くのは細部まで正確に描くこと（それは不可能だ）ではなく、記憶の表象であって、はるか遠い昔の出来事ではあるが、今もなお共鳴してやまない一瞬間を見定めるためのレンズなのである⁴³」と指摘する。

⁴¹ Laurent Dubois, *A Colony of Citizens: Revolution and Slave Emancipation in the French Caribbean, 1789-1804*, Chapel Hill, London: University of North Carolina Press, 2004, pp. 432-434.

⁴² Dubois, *Avengers of the New World: The Story of the Haitian Revolution*, Cambridge: Harvard University Press, 2004.

⁴³ Courtney Young, "Painting Mystery and Memory: Bois Caiman in Visual

3. 歴史画にみる歴史意識

歴史的な出来事を題材にした絵画はハイチ・アートの重要なジャンルとなってきた。とくに1990年／1991年には多くの歴史画が制作された。先に示したアンドレ・ノルミルの『カイマン森の儀式』は1990年の作品だが、1791年8月の黒人奴隷蜂起から起算して200周年にあたる1991年にはハイチ人の歴史画と歴史意識の特色を伺うことのできる作品が相次いだ。

以下では4つの作品を順に取り上げる。旧著で論じたことがあるが⁴⁴、一部修正・補筆して再論する。

- ・ウィルソン・アナクレオン画『蜂起した奴隷のマカンダルが魔力で焚刑の火中から飛び出す』
- ・フランツ・ゼフィラン画『ブクマンの斬首された頭が蜂起した奴隷たちに示された』
- ・エディ・ジャック画『ソントナクスが解放された奴隷たちに武器を渡す』
- ・エティエンヌ・シャヴァンヌ画『トゥサン・ルヴェルチュールの自由の樹』



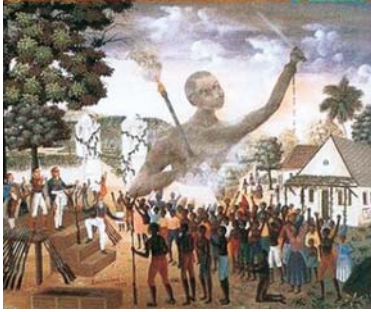
ウィルソン・アナクレオン画



フランツ・ゼフィラン画

Art” <http://sites.duke.edu/blackatlantic>.

⁴⁴ 浜『カリブからの問い』230-233頁、浜「ブラック・ディアスポラとハイチ・アート」(『学園論集』132号、2007年6月)



エディ・ジャック画



エティエンヌ・シャヴァンヌ画

ウィルソン・アナクレオン画『蜂起した奴隷のマカンダルが魔力で焚刑の火中から飛び出す』は、いわゆる「マカンダルの陰謀事件」の首謀者フランソワ・マカンダルの処刑場面である。黒人奴隷のマカンダルは大規模な逃亡奴隷団を組織し、七年戦争のさなかの1757年秋から翌年春にかけて、薬草などから作った毒薬を飲料水に混入して白人たちの大量殺戮を謀ろうとした。この計画は密告によって未遂に終わり、逮捕されたマカンダルは1758年3月に衆人環視のなかで焚刑となった。この焚刑のとき、炎が立ち上ると、身体に巻き付けられていた鎖がもぎ取られ、マカンダルは宙に飛び上がったように見えたという。そのことから、マカンダルは蚊になって飛び去り、またいつの日にか人間の姿となって戻ってくるのだという伝承が生まれ、長く語り継がれ記憶されてゆくこととなる。1968年にマカンダルの肖像を入れた20グルド（約400円）コインが铸造され、首都ポルトープランスのナショナルパレス前の独立記念広場に置かれている漆黒



マカンダルのコイン



ナショナルパレス前の記念碑

のブロンズ像、奴隷解放と独立の担い手となった逃亡奴隷たちを顕彰する碑（アルベール・マンゴネーズ作、1987年）はマカンダルをモデルにしたものである。

フランツ・ゼフィラン画『ブクマンの斬首された頭が蜂起した奴隷たちに示された』は黒人奴隷の一斉蜂起のリーダーとなったブクマンの処刑の場面を描いている。ブクマンはサン＝ドマング北部のル・カップ（現在のカパイシアン）への進軍中に捕えられ9月初めに処刑された。そして、胴体から斬り離された彼の頭は釘刺しにされ、「叛徒の首領ブクマンの頭」と表示されて市門の外に晒された。ハイチ・アートを特徴づける鮮明な色遣いが、処刑の凄惨さとともにブクマンの背後に翻るトリコロールを際立たせている。

エディ・ジャック画『ソントナクスが解放された奴隷たちに武器を渡す』は、サン＝ドマングに派遣されたフランス政府代表委員のレジェ＝フェリシテ・ソントナクスが1793年8月29日に、黒人奴隷蜂起を発端とする「騒擾」に乗じてサン＝ドマングに侵攻してきたイギリス軍、スペイン軍と戦わせるため、黒人奴隷に武器を与えてフランス軍に編入し、その代償として奴隷解放を宣言した情景を描いたものである。

途中だが、ここで、対比のためにフランス革命時代のフランス人が黒人奴隷制の廃止について描いた3葉の図版と絵を見ておこう。



左端のメダイオンは1787年に黒人奴隷制を批判する結社として設立された「黒人の友の会」(Société des Amis des Noirs)が各種の発行物に印刷したシンボルマークである。黒人を鎖に繋がれて跪き手を合わせ哀願するポーズで描き、その周囲には「私はあなたの同胞ではないのでしょうか」という意味のフランス語が書かれている。「私はあなたの同胞であり、あなたと同じ人間なのです」という含意である。

中央は1794年2月4日の革命議会(国民公会)による奴隷制廃止決議を記念する図が描かれた煙草入れである。左後方に力なく佇むイギリス兵と鞭を手に腕組みをしながら忌々しげな表情で眺めている奴隷主を尻目に、フランス人が差し出す文書——そこには〈Liberté〉(自由)と〈Abolition〉(廃止)の文字が書かれている——を跪いて押し戴くようにする黒人と混血児が描かれている。

右端は『1794年の奴隷制廃止のアレゴリー』(作者不詳)である。三色旗を背に「マリアンヌ」像を指差すフランス人と、鎖から解き放たれ中腰となって両手を広げる黒人とが対照的なポーズで描かれている。

以上の3葉の図版と絵では、〈解放する者＝フランス人(あるいはフランス革命)、解放される者＝黒人奴隷〉という主客の関係が見事に視覚化されていると言ってよいであろう。このような描き方は、1794年の奴隷制廃止決議——「国民公会は、すべての植民地における黒人奴隷制が廃止されることを宣言する。したがって国民公会は、植民地に居住する人はすべて、肌の色の区別なしにフランスの市民であり、憲法が保障するすべての権利を享受するものであることを宣言する。(以下略)」——が奴隷解放とは「フランスの市民」になることだとしていることと併せて、決議採択の際に発せられた言葉とも符合する。ダントンは賛成演説で「フランス人民の代表者諸君。これまで我われは、エゴイストとして我われだけのために自由を布告したにすぎなかった。だが今日、我われは全世界に向って普遍的な自由を宣言するのであり、後世の人びとはこの法令に自らの栄光を見いだすであろう。私は国民公会が兄弟たちの自由を宣言すべきときが来たことを悟った。だが、自由の恩恵を授けたのち、我われはいわば調停者にならな

ければならない。我われは、我われの事業を不完全なものにすることによって、自らの栄光を傷付けてきた。我われは後世の人びとのために働いているのであり、植民地に自由を送りこむのである。まさに今日、イギリスは死んだ。新世界に自由を投じるならば、自由はそこで豊かな実を結び深く根を下ろすであろう〔傍点筆者〕と述べた。ここには、フランスこそが自由の創始者であり守り手であるという自意識と、植民地の黒人奴隷はその恩恵に浴するのだという見方、ひとことで言ってパターンリズムあるいは「文明化の使命」のイデオロギーが露わである。

関連して、さらに図版を2枚追加する。



左の〈Les Colonies Françaises〉(フランス領植民地)と表題された1900年頃の冊子の表紙にはフランスの植民地主義を象徴する図が描かれている。甲冑をまとった「マリアヌ」が左手に持つトリコロールで彩された盾には〈progrès〉(進歩)〈civilisation〉(文明)〈commerce〉(商業)と書かれている。右の1911年11月19日付〈Le Petit Journal〉(小新聞)誌の表紙にはモロッコの文明化を表象する図が描かれ、「マリアヌ」が左手に持つ壺から金貨を溢し、それにモロッコ人が群がっている。

少し説明する。ハイチの独立によって第一期植民地帝国が崩壊した後のフランスは、アルジェリアに足場を築く1830年を始期として第二期植民地帝国の時代に入る。1802年にナポレオンが1794年の奴隷制廃止決議を反故にして奴隷制を復活させたため1848年に改めて、そして最終的に奴隷制廃止が行われたが、このことが植民地帝国形成を加速させることとなった。その主たる矛先はアフリカだったが、「中間航路」という筆舌に尽

くし難い地獄図だった大西洋黒人奴隷貿易も、レイシズムと剥き出しの暴力によって人間を管理し搾取する最悪の人権侵害である奴隷制度も廃止となった今、道徳的な後ろめたさを覚えることなくアフリカ人の労働力を「活用」できることになる。『人権宣言』の「普遍性」を誇示し、喧伝しながら、「文明には非文明を文明化する使命がある」とする「文明化の使命」(mission civilisatrice)、「『人権の国フランス』の文化による人類の教化は普遍的な任務である」とする「フランス・イデオロギー」(l'idéologie française)、「植民地主義は共和主義の理念を実現するものだ」とする「植民地共和国フランス」(La France, république coloniale)などの言説を大義名分として植民地主義が唱道され推進された。『人権宣言』が植民地帝国構築ための「正典」となり、フランスは植民地に「自由」や「富」「平和」「文明」をもたらすのだとされ、その植民地主義を表象するのに「マリアンヌ」像が用いられたのである⁴⁵。

そこで、エディ・ジャック画『ソントナクスが解放された奴隷たちに武器を渡す』に戻る。フランス革命の同時代人の作品とエディ・ジャックの作品とのコントラストは明瞭であろう。武器を受け取る奴隷たちは、ただ一人が跪いている他はすべて直立の姿勢で、拳を突き上げて解放の喜びを全身で表しているように見える。印象的なのは画面中央背後にひときわ大きく薄い灰色で描かれる人物像である。右手で松明を掲げ左手で千切られ

⁴⁵ Nicolas Bancel / Pascal Blanchard / Françoise Vergès, *La république coloniale*, Paris: Éditions Albin Michel S. A., 2003. 平野千果子／菊池恵介訳『植民地共和国フランス』(岩波書店, 2011年); Gilles Manceron, *Marianne et les colonies. Une introduction à l'histoire coloniale de la France*, Paris: La Découverte, 2003; Dino Constantini, *Mission civilisatrice, le rôle de l'histoire coloniale dans la construction de l'identité politique française*, Paris: La Découverte, 2008. 平野『フランス植民地主義の歴史——奴隷制廃止から植民地帝国の崩壊まで』(人文書院, 2002年); 西川長夫『フランスの解体? ——もう一つの国民国家論』(人文書院, 1999年); 浜前掲『ハイチ革命とフランス革命』

た鎖を垂らしながら剣を握った亡霊のような人物は、1791年の一斉蜂起に
起ち上がった奴隷たちをはじめ解放を目指して抵抗を繰り返してきた数多
の黒人たちを象徴しているのであろう。ハイチ人にとって奴隷解放は、与
えられたものではけっしてない、300年の長きにわたる苦難の末について
自ら闘い取ったものにほかならない、ということであろう。

フランス革命の同時代人の作品とエディ・ジャックの作品とのコントラ
ストは、フランス人とハイチ人との歴史意識の違いを浮き彫りにしている。

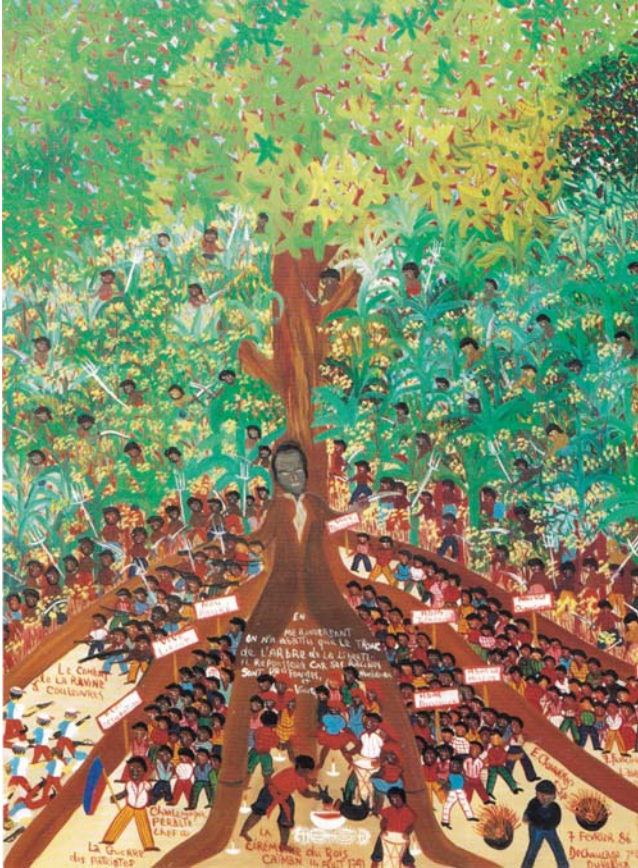
さて最後に、エティエンヌ・シャヴァンヌ画『トゥサン・ルヴェルチュール
の自由の樹』である。前にも示したが、次頁に拡大して掲載する。

まず表題にあるトゥサン・ルヴェルチュール (Toussaint Louverture) に
ついて。サン＝ドマングでおそらく1743年に奴隷として生まれたトゥサ
ンは34歳のとき(1777年頃)に解放奴隷となった。そして20ヘクタール
ほどの土地と13人の黒人奴隷を所有して小規模なコーヒー園を経営した。
1791年8月22日に始まる黒人奴隷の一斉蜂起から約1ヵ月間は静観の態
度をとっていたが、ブクマンが処刑された後に蜂起に合流し、その類稀な
政治的・軍事的手腕によって急速に頭角を現わし、ハイチ革命の最大の指
導者となった。そして、彼は1801年7月8日には「フランス領植民地サン
＝ドマング憲法」を公布して自ら終身総督となる。だが、そのことがナポ
レオンの激怒を買い、トゥサンは1802年6月7日に謀略によって逮捕さ
れてフランスに護送され、1803年4月7日アルプス山中のジュー要塞の牢
獄で非業の死を遂げた。彼はハイチ革命の英雄の一人であり、ポルトー
フランスのナショナルパレス前の独立記念広場には、先に示した逃亡奴隷を
顕彰する碑とともにトゥサンの像もある。

そのトゥサンは絵の中央に聳える大樹の幹となり根となって描かれてい
る。なぜトゥサンが樹となって描かれるのか、したがってまた、『トゥサ
ン・ルヴェルチュールの自由の樹』という絵の表題の意味については、二
通りの解釈が可能と思われる。

一つの解釈は、トゥサンがフランスに護送された「英雄号」の船上でフ
ランス人に向かって叫んだといわれる言葉に由来するものである。その言

「カイマン森の儀式」の表象（浜）



葉は、絵のなかではトゥサンの両足の間に白色で書き込まれている。〈En m'arrachant à mon pay, on n'a abattu à Saint-Domingue que le tronc de l'arbre de la liberté des noirs. Cet arbre repoussera vite, car ses racines sont

profondes et vigoureuses.) (私を打破しはしたが、あなた方はサン＝ドマングの自由という名の樹の幹を倒したにすぎない。やがて再び根から幹が生長するだろう。自由は、今やしっかりと無数の根を下ろしているのだから。[傍点は筆者])

もう一つの解釈は、トゥサンの言葉が書き込まれた、そのすぐ下、〈La Cérémonie du Bois Caiman, 14 Août 1791〉(カイマン森の儀式, 1791年8月14日)の文字とともに、その時の様子が描かれた場面に関連している。前述したように、この儀式は一斉蜂起の準備集会としてヴードゥー・セレモニーに従って行われたものである。ところで、そのヴードゥーにおいて「マプー mapou」と呼ばれる大樹(パンヤ科のセイバ・ペントンドラ)は、道路や十字路の守護霊で、霊界の門番役を司る「レグバ legba」が宿る聖樹とされるものなのである。だとするならば、トゥサンはこの「マプー」に宿る「レグバ」そのものと見なされているのであろう。加えて、ルヴェルチュール(Louverture。またはL'Ouvertureとも綴る)という名前そのものも、この「レグバ」に由来するという有力な解釈が存在する。ラルフ・コーンゴールドの説明によれば、ヴードゥーの聖歌に「レグバ様、私のために扉を開けたまえ」という一節がある。クレオール語で〈Papa legba, louvri baryè pou mwen〉、仏訳では〈Papa Legba, ouvre la barrière pour moi〉、英訳では〈Papa Legba, open the gate for me〉となるものだが、ルヴェルチュールの名はその〈louvri〉に由来し、「自由(または運命)の扉を開く者」を意味する綽名であるという。

このように、やや込み入った解説をするのは、次のような事情からである。トゥサン自身は敬虔なカトリック教徒であったことに加えて、1801年に彼の名で公布された「フランス領植民地サン＝ドマング憲法」ではローマ・カトリックが「公に表明された唯一の宗教」と規定されたこともあって、トゥサンはヴードゥーに対して批判的ないし拒否的であったとされることが多く、シーガルもこの説を採用している。だが、筆者は完全にはこの説に与しない。少なくともハイチ革命の初期の時点ではヴードゥーを許容し、あるいはそのエネルギーに依拠しようとしたし、一方、圧倒的多数

がヴァードゥーである民衆の側もトゥサンを自分たちの救世主と見なして崇敬し期待していたと考えるべきであろう。現代のハイチ人のトゥサンに対する見方もそれに相通じるものでであろう。この絵は、そのような意味をもつものと理解することができるのである。

さて、絵の下段、木の根の間にはハイチ史上の出来事が5つ挿入されている。左から順に見ておこう。

〈Le combat de la Ravine à Coulevre〉（ラヴィナクルーヴルの戦闘）は、ハイチ革命の進展を抑えるためにナポレオンが派遣した精鋭部隊（左隅に青・白・赤のトリコロールの軍服姿で描かれている）と、これを迎え撃つトゥサン率いる革命軍との間で1802年2月23日に起こった戦闘を描いたものである。それは、双方に千人を越える死者が出た血みどろの戦闘だったが、これ以降、ハイチ革命は次第にフランスからの独立闘争という性格を鮮明にしてゆくこととなった。

次の〈Charlemagne Peralte, chef de la guerre des patriotes〉（愛国者の闘いの首領シャルルマーニュ・ペラルト）で、「Non Bouké ブケ〔残念ながら、その意味は分からない〕反対」、「Vive Liberté 自由万歳」、「Abas Occupation 占領粉碎」のプラカードを掲げる民衆の先頭に立って、青と赤の旗（ハイチ国旗）を手にしているのがペラルトである。当時のハイチ大統領ヴィルブラン・ギヨーム・サムが投獄中の政治犯を殺害したことに抗議する暴動に端を発する政情不安を捉え、「自治能力を欠く黒人に代わって秩序を回復する」「文明は非文明に介入する権利がある」と公言して米国が投入した海兵隊員と、これに抵抗するハイチ人と共に「カコ Caco」と呼ばれた農民ゲリラとの間で繰り返された戦闘を描いている。1915年から34年までの20年間つづいた軍事占領はハイチの主権喪失をもたらした⁴⁶。

ちなみに、米国海兵隊は1919年10月にペラルトを待ち伏せで逮捕して処刑し遺体を戸板に貼り付けて晒したうえ、抵抗運動を抑える見せしめと

⁴⁶ 浜「ハイチ史における植民地責任——『アメリカによる軍事占領』をとおして」（『学園論集』147号、2011年3月）

する目的でその写真を流布させた。だが皮肉にも、米国の意図に反して、キリストの磔刑を彷彿とさせる姿のペラルトは「解放と抵抗の英雄」として今日まで語り継がれることとなる。「ハイチ・アートの巨匠」とされるフィロメ・オバンは多くの歴史画を残しており、下に示した『シャルルマニュ・ペラルトの磔刑』(1955年)と『1915年9月5日、カコと米国海兵隊との戦闘』(1954年)はその代表作である。



米軍が撮影した写真



フィロメ・オバンの作品

下部中央は〈La Cérémonie du Bois Caïman, 14 Août 1791〉(カイマン森の儀式, 1791年8月14日)である。「カイマン森の儀式」についてはすでに詳述してあるので説明は不要だろう。地面には「ヴェヴェ」が描かれ、黒豚から血が抜かれている。

右から2つめの〈7 Février 86, déchaucage, Jn Claude Duvalier〉([19] 86年2月7日, デショカジュ, ジャン＝クロード・デュヴァリエ)は、広範な国民の民主化運動の展開によって、フランソワ・デュヴァリエとジャン＝クロード・デュヴァリエの父子2代にわたる大統領のもとで29年間続いた暗黒の独裁政治に終止符を打った事件の描写である。「デショカジュ」とは「根こそぎにする」という意味のクレオール語で、デュヴァリエ支持派を完全に追放しようという民主化運動の合言葉である。民衆が手にするプラカードには「Abas Zinglins ゼングレン [19世紀中葉の大統領フォスタン・スルークが創設した大統領直属の黒人志願兵が起源で、武装強盗団として恐れられた] 打倒」「Abas La Macoute マクート [デュヴァリエ時代の秘密警察トントン・マクート] をやっつけろ」「Abas Duvarier デュヴァリエ打倒」などの文字が書かれている。「E. Chavannes」の文字も見えるが、

この絵の作者であるエティエンヌ・シャヴァンヌ（彼もこの運動に参加したのであろう）の名前と思われる。

最後に右端の〈7 Février, Lavalas, Titid〉（〔1991年〕2月7日、ラヴァラス、チティド）は、ハイチの歴史上最初の民主的な選挙で圧倒的な支持を得て当選した「改革と民主主義のための国民戦線」候補のジャン＝ベルトラン・アリスティド（ハイチ国民は親しみをこめて「チティド」と愛称した）の選挙スローガンである「ラヴァラス」（「汚物や不正を洗い流し浄化する激流」の意味）と、この絵が描かれる直前の彼の大統領就任の日付が記されている。プラカードには「Vive Toussaint トゥサン万歳」、*「Nou Vle Changemen 我々は変化を望んでいる」*と書かれている。右隅のプラカードは半分以上が欠けていて「V」と「T」の文字しか判読できないが、おそらく「Vive Titid チティド万歳」であろう。アリスティドはナショナルパレスで行われた大統領就任式のスピーチで広場を埋めた民衆に次のように述べた。「私たちは第二の独立を勝ち取るために200年の歳月を要しました。私たちは、フランスからの独立のために『解放を、しからずば死を』と呼びかけました。私たちは今、力を込めて『民主主義を、しからずば死を』と叫ばなければなりません。⁴⁷」

このように、『トゥサン・ルヴェルチュールの自由の樹』には、ハイチ革命と建国後の自由と独立、民主主義を目指す幾多の闘いが時間と空間を超えて一つに融合されて描き込まれているのである。1791年（「カイマン森の儀式」）、1802年（奴隷解放運動から独立を目指す運動への転機）、1919年（米国による軍事占領に反対する闘争）、1986年（デュヴァリエ独裁体制の終焉）、1991年（民主化への新たな一歩）はハイチ史の節目となる出来事だが、それらを左から時系列で順に並べるのではなく、1791年を中心に位置させているのである。「カイマン森の儀式」はたえず立ち返るべき原点であるということであろう。サンディー・ブレーズは、多くのハイチ人に

⁴⁷ 佐藤文則『ハイチ——目覚めたカリブの黒人共和国』（凱風社、1999年）148頁。

とって過去と現在は分かちがたく結びついており、過去は現在に、現在は過去に密接している。「カイマン森」は今もなお抵抗と結束のシンボルであり続けているのだとする⁴⁸。けだし、正鵠を射た指摘である。

ハイチの著述家ウィーナー・ケルン・フルーリモンは『ハイチ：1804～2004年——忘れられた革命200周年』（2005年）でハイチ史上の特筆すべき人物としてフランソワ・マカンドル、ブクマン・デュッティ、トゥサン・ルヴェルチュール、ジャン＝ジャック・デサリーヌ、シャルルマーニュ・ペラルトの5名を挙げている⁴⁹。先に示した1991年の作品には、ハイチの初代元首となったデサリーヌを除く4名が描かれている。

歴史画は過去へのノスタルジーではない。ハイチ再生の願いを込めた画家たちのメッセージであり、歴史画は特別の意味を持っている。

おわりに

昔も今もハイチでは文字が唯一の情報伝達手段ではない。植民地時代には読み書きの能力を身に付ける機会を奪われたし、今日でも15歳以上の非識字率が60パーセント強にも上るとというのが現実である。文字に代わる情報伝達手段になったのは声や音楽などの音であり、絵画や図像である。

ポール・ギルロイの『ブラック・アトランティック——近代性と二重意識』（1993年）⁵⁰は、音楽という言葉をいかにして創造的に用いたかを描きだすことをとおして、黒人がいかにして自らの解放を目指したか、さらに

⁴⁸ Sandie Blaise, “Bois Caïman as a Symbol of Resistance”, “Bois Caïman as a Symbol of Unity”, <http://sites.duke.edu/blackatlantic>.

⁴⁹ Wiener Kerns Fleurimond, *Haïti: 1804-2004. Le Bicentenaire d'une Révolution oubliée*, Paris: L'Harmattan, 2005, p. 78.

⁵⁰ Paul Gilroy, *The Black Atlantic. Modernity and Double Consciousness*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1993. 上野俊哉／毛利嘉孝／鈴木慎一郎訳『ブラック・アトランティック——近代性と二重意識』（月曜社、2006年）

は識字能力を持つ白人男性という自己のアイデンティティに何の疑いも持たない「啓蒙」の概念が、そこから排除される人びとを作り出すことで成り立っていたことを抉りだしている。

ガブリエル・アンチオープの『ニグロ、ダンス、抵抗 17～19世紀カリブ海地域奴隷制史』(1996年)⁵¹は唄やダンスに注目する。単調な畑作労働の際には掛け声に合わせて一定のリズムで身体を動かすことが見られ、それは禁止されなかった。作業効率を高めるという「効用」があると考えられたからである。労働の際の掛け声は唄となり身振りはダンスとなる。そして労働の場を離れて奴隷小屋の周囲でも行なわれるようになり、これも禁止の対象とはならなかった。苛酷な労働や抑圧に対する不満の捌け口＝安全弁となると考えられたのである。一方、奴隷たちにとっては労働から解放された憂さ晴らし、「ハレ」や「ケ」であったし、互いの絆を確かめあう手段にほかならなかったのである。中世ヨーロッパで鐘やラッパなどの音が文字に代わるコミュニケーション手段となったのと同じような意味でダンスや太鼓の音は黒人奴隷同士の意味を通わせる手段であった。現在のハイチには「コンビット coumbite」と呼ばれる共同農耕の習慣がある。それは数人が奏でる音楽に合わせて農民が一行に並んで農作業を行なうものである。今はかなり儀礼的な性格が強いが、その起源は植民地時代に遡る。



奴隷の踊り



カランダ



コンビット

⁵¹ Gabriel Entiope, *Nègres, dance et résistance. Pour l'histoire de l'esclavage dans la caraïbe du XVII^e au XIX^e siècle*, 1996, 石塚道子訳『ニグロ、ダンス、抵抗——17～19世紀カリブ海地域奴隷制史』(人文書院, 2001年)

アンチオーブはダンスにレジスタンスの性格を見出している。彼はこう言う。ダンスは「叛乱、毒、自殺、墮胎、嘘、へつらい、からかい、民話、歌、畑、密告、逃亡と同等の奴隷の自由を求める抵抗運動の総体」の一部であり「奴隷は、ただだんに気晴らしのためや、プランテーションの利益のために踊ったのではない。彼らはダンスに政治的価値と内容を付与した。つまり彼らはダンスにおいて逃亡を果たしたのである」。とくにレジスタンスの性格を持つのに「カラダ calandat」と呼ばれるものがある。フランス語で〈bâton bataille〉英語では〈cudgelling match〉と訳されるが、熱狂的な音楽とダンスのなかで棒を用いた擬似戦闘が行なわれる。ダンスに合わせて打ち鳴らされる太鼓の響きは白人たちに恐怖を与えたという。荒井芳廣は、ハイチでは「声の文化」が重きをなすことを強調している⁵²。

声や音や身振り・手振りなどの動作やダンス、口頭伝承に加えて重要なのが絵画や図像、シンボルである。現在のハイチ国旗はその中央に国章が描かれている。図柄には「解放」を象徴するフリジア帽を乗せた椰子の木、六本の国旗、大砲、砲弾、太鼓、ラッパなどが描かれたユニークなものである。その図柄は独立直後の国章もほぼ同じであり、ハイチの建国が激しい戦いをとおして達成されたことを表現している。現在の国章には〈L'UNION FAIT LA FORCE〉(団結は力なり)という国の標語が、建国直後の国章では国名の〈REPUBLIQUE D'HAÏTI〉のほか〈EGALITE〉(平等)と〈LIBERTE〉(自由)の文字が書かれている。



現在の国章



建国直後の国章

⁵² 荒井芳廣「ハイチにおける声の文化と民俗的修辞学の可能性」(『ラテンアメリカ・カリブ研究』6号, 1999年5月)

5月18日は「国旗の日」の祝日である。「5月18日」の日付は、現在の国旗の祖型となるハイチ革命の旗が1803年5月18日制定されたことに由来する。その旗を紡いだとされる女性カトリーヌ・フロン（Catherine Flon）の肖像を載せた10グルド（約200円）紙幣が発行されている。



カトリーヌ・フロンと彼女の肖像を載せた10グルド紙幣



5グルド・コイン

5グルド・コイン（約100円）には、表面に国章、裏面にはトゥサン・ルヴェルチュール、アンリ・クリストフ、ジャン＝ジャック・デサリーヌ、アレクサンドル・ペティオンの肖像が刻印されている。この4人はいずれもハイチ革命の立役者であり建国の祖である。「カイマン森の儀式」の情景が切手に描かれるのと同じように、ハイチ建国の歴史と国の理念が日常的に想起できるようになっているのである。

「カイマン森の儀式」の表象は、絵画と歴史叙述のいずれもが、実際の観察や確たる史料に裏付けられた「事実」に基づく知覚表象ではなく、口頭伝承に基づく記憶表象あるいは作者の想像表象、アレゴリーであると言ってよかろう。これらの記憶表象や想像表象は、「事実」とイコールではないが、「大国」「マジョリティー」「強者」である「権力」によって「沈黙」させられ周縁に押し込められたハイチの「歴史」を復元するための方法なのである。

〈付記〉

掲載した絵画・図版の主たる出典は以下のとおりである。

Selden Rodman, *Haiti: The Black Republic, The Standard Guide to Haiti*, Old Greenwich: Devin-Adair Pub., 1973.

Selden Rodman, *Where Art Is Joy. Haitian Art: The First Forty Years*, New York: Ruggles De Latour, 1988.

Jean Métellus / Marcel Dorigny, *De l'esclavage aux abolitions, XVIII^e-XX^e siècles*, Paris: Editions Cercle d'Art, 1998.

Gérard Théliér / Pierre Alibert, *Le grand livre de l'esclavage, des résistances et de l'abolition*, Paris: Orphie, 1998.

その他、逐一出典を示さないが、関連するウェブ・サイトから多数の画像が得られた。